

14世紀頭韻詩韻律研究の現況と展望

井上典子

はじめに

「頭韻詩」は、韻律構成の主要な要素として（脚韻ではなく）頭韻を用いる詩を一般的に指すが、最もよく研究されているのはゲルマン語派の初期の文学に見られる頭韻詩の伝統である。本論文では、英語で書かれた頭韻詩、特に、イングランド14世紀後半から15世紀初頭にかけてウエストミッドランド（West Midlands）を中心として制作された中英語で書かれた頭韻詩群に着目する。ME頭韻詩がOE頭韻詩の復興（revival）または継続（survival）であると論じられることがあるが、ME頭韻詩の起源とその発達に関しては、いまだ研究者の一致した見解はない。ここでは、便宜上、14世紀後半に制作された頭韻詩群を‘Alliterative Revival’「頭韻復興」に属する頭韻詩群またはME頭韻詩と呼ぶ。

長年、多くの研究者たちが、ME頭韻詩の最も顕著な特徴の一つとして、その韻律の柔軟性および無規則性を主張していた。「韻律規則」（‘metrical rules’）と呼ぶことのできるようなリズムの規制が存在するとは考えられてこなかったのだ。しかし、1990年代前後に、Hoyt N. Duggan および Thomas Cable が、前半行（a-verse）と後半行（b-verse）と呼ばれる二つの半行からなる非脚韻頭韻長行の後半行を支配する韻律規制を次々に発見したことがきっかけとなり、頭韻詩研究は一気に加速し、この30年で飛躍的に発展した。著者も、自らの研究結果に基づき、新たに非脚韻頭韻長行詩の韻律規則を提案し、その有効性を実証してきた。

したがって、本論文の目的は、ME頭韻詩韻律研究における現在までの成果を簡単にまとめ、著者自身の仮説を提示した上で、新たに発見した証拠に基づき、自らの仮説の有効性を実証することである。本論では、「頭韻と韻律強勢の関係」に的を絞り論じていく。最後に、結論および頭韻詩研究の展望を述べる。

1. 非脚韻頭韻長行の韻律構造

後半行の韻律構造はかなり明確になってきた。後半行では、脚韻詩の「弱強」のような規則的なリズムの繰り返しは徹底して避けられる。最新の研究では、非強勢音節の数と位置だけでなく、その母音の質（曖昧母音か否か）も厳しく規制されていたことが分かってきている。¹

後半行と比較して前半行の韻律構造は複雑であり、いまだ議論が続いている。最大の争点は、前半行に生起することのできる韻律強勢の数である。前半行は三つもしくはそれ以上の韻律強勢を持つことができると考える研究者がいる一方、² 前半行の韻律強勢の数は絶えず一定して二つであり、三つ以上に変動することはないと主張する研究者もいる。³ さらに後者の立場を取る研究者の間でも、二つの韻律強勢は常に頭韻を伴うと考える立場と、頭韻と韻律強勢は常に一致しなくてもよいと主張する立場に分かれる。筆者は一貫して「二つの韻律強勢」および「韻律強勢

と頭韻は必ずしも一致しない」という立場を取っており、自らの検証結果に基づいた韻律規則を提案し、その妥当性を論証してきた。⁴ 以下、前半行において「韻律強勢と頭韻は必ず一致するのかどうか」という点に的を絞り、論証していく。

2. Two-Beat A-Verse Theory : 韻律強勢と頭韻は必ず一致するか否か

前半行における韻律強勢の数に関する問題はひとまず置いておき、ここでは、前半行の韻律強勢の数が常に二つとする立場 (two-beat a-verse theory) を支持する研究者の中で一番の争点となっている韻律強勢と頭韻の関係について議論を進めていく。

前半行には通常、二つ (時には一つ) の open-class word が生起し、その二語が韻律強勢も持つ (例: SG 20 ‘Ande quen þis Bretayn watz bigged’ – 太字が頭韻音を表す)。⁵ これを standard a-verse と呼ぶ。問題は、crowded (または extended) a-verse と呼ばれる種類の前半行で、韻律強勢を持つことのできる語が三つ以上生起する場合の考え方である。例えば、以下のような例である:⁶

As growe grene as þe gres (SG 235a)

Lepe lytly me to (SG 292a)

このような前半行の場合、三つの語のうち、どの二つが韻律強勢を持っているのかという点で、研究者の意見が二つに分かれることがある。『サー・ガウェインと緑の騎士 (*Sir Gawain and the Green Knight*)』の韻律分析の先駆者である Borroff および Turville-Petre は、二人とも、「韻律強勢と頭韻は常に一致しなくてもよい」という見解を示しているものの、非脚韻頭韻長行の「韻律規則」は提示しておらず、一作品の韻律・文体分析に限定されている。そのため、引用した二行をこの二人がどのように解釈するかは明確には分からない。

そこで著者は、『サー・ガウェインと緑の騎士』および他5作品の韻律分析をし、後半行および前半行を支配する新しい韻律規則を提案した。この研究結果の中で、1) 頭韻詩人たちが、Turville-Petre が ‘standard rhythm’ と呼ぶ、二つの韻律強勢に挟まれた二つ (または三つ) の非強勢音節から成る long dip (/xx/—/は強勢、xは非強勢音節を意味する) のリズムを持つ半行を書く傾向が極めて高いこと、2) 非脚韻頭韻長行の韻律構造において、パターンと規則性という内部的一貫性を生み出すのは、aa/ax頭韻型ではなく、この「強弱弱強」という long dip のリズムであり、頭韻よりむしろこのリズムが韻律構造においてより根本的、基本的な要素であると主張した。⁷

これとは反対に、Putter-Jefferson は、『サー・ガウェインと緑の騎士』を含む複数のテキストを検証した結果、「韻律強勢と頭韻は必ず一致する」と結論付け、彼ら独自の韻律規則を提示した。つまり、著者と Putter-Jefferson は「前半行は常に二つの韻律強勢を持つ」という点では共通しているが、「韻律強勢と頭韻の関係」については正反対の立場なのである。些細な違いのように見えて実は非常に重要である。⁸

では上記に引用した詩行において、この相違点が具体的にどのような問題となってくるかを簡単に述べたい。⁹

As growe grene as þe gres (SG 235a)

Lepe lyȝtly me to (SG 292a)

SG 235aは、'growe'、'grene'、'gres' と三つのopen-class wordを含むcrowded a-verseである。この場合、「前半行の韻律強勢が常に二つである」との前提に立つと、上記三つのopen-class wordの二つを選択して韻律強勢を与えることになる。SG 235aに関しては、三つのopen-class wordがすべて頭韻を踏んでいることから、Putter-Jeffersonも著者も同じく'grene' と 'gres' に韻律強勢があると考えられる。しかし、SG 292aにおいては解釈が異なる。この前半行においてopen-class wordは 'lepe' 'lyȝtly' の二つのみだが、中間休止前に生起し、頭韻を踏んでいない前置詞の 'to' は倒置のために統語的強勢を持つ。つまり、頭韻によるprominence (卓立) はないが韻律強勢を受けるに等しい統語的強勢を持っているのだ。

Putter-Jeffersonは、「韻律強勢と頭韻は必ず一致する」という立場から、頭韻を踏んでいる 'lepe' と 'lyȝtly' が韻律強勢を持ち、/x/xxxというリズム・パターンとして解釈するだろう。一方著者は、'lyȝtly' と 'to' に韻律強勢があり、行頭のopen-class word ('lepe') は、initial long dip (行頭から最初の韻律強勢までのdip) の一部となり、その結果、この前半行はxx/xx/というlong dipが二つあるリズムを持つと解釈する。著者は、これらの例を含めcrowded a-verseの大多数が、standard a-verseが持つ典型的なリズム・パターンと同じリズムを持つと論証してきた。¹⁰

ここでは詳細な議論を省くが、Putter-Jefferson説に基づき詩の韻律を調べていくと、上述のSG 292aのように、前半行の唯一のlong dipが最初の韻律強勢の前後ではなく、二つ目の韻律強勢の後 (final long dip) に生起する、尾が長いリズム (/x/xxx(x)) を持つ行が少なからず出てくるのだ。Putter-Jeffersonの韻律規則に反するものではないが、standard a-verseが持つ二つの強勢の間に起こるmedial long dipを基礎としたリズム・パターンからは大きく逸脱する。「頭韻と韻律強勢が常に一致する」という考え方は、明らかに二つしか韻律強勢がないと考えられるstandard a-verseだけを考慮した場合、ほとんどの行を説明できるだろう。Putter-Jefferson説に違反する行は非常に少ないはずだ。事実、彼らが提案した韻律規則のベースとなった韻律分析には、crowded a-verseは含まれていないのである。¹¹ 「頭韻と韻律強勢が常に一致する」と唱える説自体は、非常にシンプルで分かりやすいため、仮説としても魅力的かもしれない。しかし、crowded a-verseを分析対象に含めると、彼らの説だけでは説明できない行が数多く出てくるのだ。

一方、著者の説は、韻律強勢が二つであるという前提に立つならば、前半行がstandardであろうがcrowdedであろうが、「ほぼすべて」の前半行を矛盾なく説明できるものである。「ほぼすべて」と言ったのは、どの韻律規則にも、その規則から外れる行、判断が難しい「例外 (exceptions)」と呼ばれる行が出てくるからである。この「例外」をさらに検証していくことで、自らの韻律規則の有効性を試し、必要であれば微調整・再考をしていくための重要な検証資料となる。時には、自分の説の有効性を実証できる貴重な例を見つけることができるものだ。以下、そのような例を取り上げ、「韻律強勢と頭韻は必ず一致する」という立場に、新たな観点から反論したい。

3. 「例外」からの発見－「*quoth*+名詞（代名詞）」の生起パターンから

著者が頭韻詩研究を始めてからもう20年ほど経つが、『ガウエイン』詩人の韻律分析を行っていた学生時代から、どのように解釈すべきか悩み続けてきた行がある。それらは、*quoth Gawan* (= *said Gawain*)¹² といった中間休止前によく見られる *quoth* 節を含む行である。

Where schulde I wale þe, *quop Gauan*, where is þy place (SG 397)
And fyue wont of fifty, *quop God*, I schal forȝete alle (CI 739)

各行とも、前半行は韻律強勢を持つことのできる語が三つ存在するcrowded a-verseである。一つの考え方は、Putter-Jeffersonの「頭韻＝韻律強勢」理論に従い、各行、頭韻を踏む二つの語－‘Where’ と ‘wale’、‘fyue’ と ‘fifty’－が韻律強勢を持ち、*quoth* 節を含む ‘þe quop Gauan’ (xxxx) そして ‘-ty quop God’ (xxx) が行末のfinal dipを形成するというものである。一方、著者の説に基づいて考えると、SG 397では ‘wale’ と ‘Gauan’、CI 739では ‘fifty’ と ‘God’ が韻律強勢を持つ。

さらにもう一つの考え方がある。上記二つの前半行は、仮に ‘quop Gauan’ および ‘quop God’ を除外して考えた場合でも（つまり、‘Where schulde I wale þe’、‘And fyue wont of fifty’ という前半行でも）、Putter-Jeffersonの韻律規則にも著者の韻律規則にも違反しない。言い換えると、これらは ‘metrical’ な（「韻律規則に従う」）前半行なのである。詩行の一部を切り取ってもなおmetricalと見なすことができる前半行は非常にまれである。そこで、著者は一つの仮説を立ててみた。もしかすると「*quoth* +名詞」は、韻律構造を超える（para-metrical）、詩人の恣意的な挿入句のようなものとして扱うべきなのかもしれない、と。そこで『ガウエイン』詩人の3作品、『サー・ガウエインと緑の騎士』、『清純 (*Cleanness*)』、『忍耐 (*Patience*)』、および『アレクサンダーの戦い (*Wars of Alexander*)』、『聖アーケンウォルド (*St Erkenwald*)』の計5つの詩において、①「*quoth* +名詞」が詩行のどの位置にどの程度の割合で生起し、②前半行の中間休止前で使われる場合には、その名詞に韻律強勢があるかないかを調査した。これによって、著者の立てた仮説が正しいのか、そうでなければ、これらの「例外」を説明するために、Putter-Jeffersonまたは著者のどちらの韻律規則が有効であるのか、といった謎を解くための手がかりを得ることができるはずである。次に、その検証結果を述べていく。

4. Long medial dip を作り出すための「定型句」(formula) としての「*quoth* +名詞（代名詞）」

全5作品の検証結果を以下の表にまとめる。今回、検証した作品で使われている「*quoth* +名詞」の全ての例を付録に記載しておくので、ここでは考察を中心に述べていく。

表1 5作品の検証結果

	合計回数	前半行			後半行
		中間休止前	行頭	行中	行頭
『サー・ガウェインと緑の騎士』 (2025行)	61	48	4	1	8
%		78.7	6.6	1.6	13.1
『清純』 (1812行)	13	12	0	0	1
%		92.3	0.0	0.0	7.7
『忍耐』 (531行)	4	4	0	0	0
%		100	0	0	0
『アレクサンダーの戦い』 (2093行: 1~1735行目、および4842~5200行目)	57	43	6	1	7
%		75.4	10.5	1.8	12.3
『聖アーケンウォルド』 (352行)	6	6	0	0	0
%		100	0	0	0

まず『サー・ガウェインと緑の騎士』から考察する。「*quoth* + 名詞 (代名詞)」が使われた回数は全部で61回であり、そのうち48回 (78.7%) が中間休止前 (pre-caesural) で使用されている。つまり、「*quoth* + 名詞」の大多数が中間休止前 (pre-caesural position) で使われており、以下に挙げる2例 (lines 398a, 1395a) を除くすべての例において、名詞が頭韻を踏み、韻律強勢を持つ。名詞が頭韻を踏み、韻律強勢を持つのは、standard a-verse (例: 1105a ‘*3et firre, quop þe freke*’) でもcrowded a-verse (例: 372a ‘*Kepe þe, cosyn, quop þe kyng*’) でも同じである。*quoth* の後に続く名詞は、「形容詞 + 名詞」(例: 1492a ‘*Do way, quop þat derf mon*’) を形成することもあり、その場合、常に形容詞が頭韻に加わる。¹³ 時には、名詞も頭韻に加わる場合も見られる (例: 1263a ‘*Madame, quop þe myry mon*’)。中間休止前に使われた例に共通しているのは、「*quoth* + 名詞 (代名詞)」の*quoth* に先行するopen-class word と*quoth* の後に続く名詞の二つが韻律強勢を持っていること、そしてその二つの韻律強勢が形成するmedial dipが、典型的に、非強勢音節を二つまたは三つ持つlong dipであり、standard rhythm (「強弱弱強」または「強弱弱弱強」リズム) を形成していることだ。つまり、韻律上必要であるmedial long dipを持っているのである。¹⁴ 言い換えると、詩人は「*quoth* + 名詞 (代名詞)」というパターンを利用して、韻律に必要なmedial long dipを作り出しているのだ。¹⁵

したがって、「to/for to + 不定詞」や「on/vpon + 名詞」と同じく、¹⁶ 「*quoth* + 名詞 (代名詞)」も、「統語的・リズム的なパターン」(syntactic-rhythmic pattern) または「定型句」(formula) であり、詩人が必要な際にmedial long dip (/xx(xx)/のリズム) を作り出すために利用したものであると考えられる。『ガウェイン』詩人は、「to/for to + 不定詞」や「on/vpon + 名詞」を中間休止前で使用した際には、行内の頭韻に加わらない不定詞や名詞を選ぶこともある (例: *Cl* 1645a ‘*Gart hym gratted to be*’, *SG* 952a ‘*Riche red on þat on*’, *SG* 67a ‘*3e3ed 3eres-3iftes on hi3*’)。このように考えると、「*quoth* + 名詞 (代名詞)」の名詞 (代名詞) が頭韻を踏まない以下の2行に関しても、確かな解釈が可能となる:

Where shoulde I wale þe, *quop Gauan* (SG 398a)
 Þat watz not forward, *quop he* (SG 1395a)

‘Gauan’ および ‘he’ は行内の頭韻には加わっていない。しかし、「*quoth* + 名詞 (代名詞)」が「統語的・リズム的なパターン」であり、他のすべての例において、規則的に中間休止前の名詞 (代名詞) および*quoth* に先行するopen-class wordに韻律強勢が与えられていることを考慮す

ると、上記2行においても、名詞（代名詞）が韻律強勢を持っていると結論付けてよからう。つまり、「韻律強勢と頭韻は必ずしも一致しない」ことを証明する一つの証拠ともなるのである。¹⁷

その他4作品の検証結果も、『サー・ガウエイン』で得た結果を裏付けるものである。どの作品においても、「*quoth* + 名詞（代名詞）」が使われるのは、圧倒的に中間休止前である（『忍耐』と『聖アーケンウォルド』は100%、『清純』 92.3%、『アレクサンダーの戦い』 75.4%）。中間休止前で使用された例は、すべて*medial long dip*を持っており、『ガウエイン』詩人以外の頭韻詩人にとっても、「*quoth* + 名詞（代名詞）」が、韻律上、便利な*syntactic-rhythmic formula*であったことが分かる。4作品中、頭韻を踏んでいない名詞は、『清純』の2行のみである：

NOW, Noe, *quoth oure lorde* (CI 345a)
And fyue wont of fyfty, *quoth God* (CI 739a)

どちらの行においても、名詞（'lorde'、'God'）は行内の頭韻に加わっておらず、代わりに先行する他の二語が頭韻を踏んでいる（'NOW'、'Noe' および 'fyve'、'fyfty'）。興味深いことに、5作品において、中間休止前において頭韻を踏んでいない名詞・代名詞を使っているのは『ガウエイン』詩人だけである。三人の詩人は「*quoth* + 名詞（代名詞）」を「*long medial dip*のリズムを作るために使う」という点で共通しているが、韻律強勢と頭韻を必ず一致させるか否かという「頭韻の使い方」については、相違が見られる結果となった。

5. 結論および展望

5作品における「*quoth* + 名詞（代名詞）」の生起パターンと韻律強勢との関係を検証した結果、中間休止前に使われた「*quoth*+名詞」は、韻律構造外（*para-metrical*）の挿入句ではなく、韻律に必要な*long medial dip*を作るために利用された*syntactic-rhythmical pattern*であることが実証された。中間休止前に使われた「*quoth*+名詞」は、必ず名詞（または名詞句を構成する形容詞）が韻律強勢を帯びる。通常、頭韻も踏む。一見、頭韻を踏まず「例外」と思われた行もすべて名詞（代名詞）が韻律強勢を持つということが実証できた。

だが、「頭韻を踏んでいない行は*scribal intervention*（写字生による介入）であり、『ガウエイン』詩人は、実は頭韻を踏む名詞を書いていたのではないか？」と疑問を抱く読者もいるかもしれない。「頭韻復興」に属する頭韻詩人の多くは、頭韻が前半行に二つ、後半行に一つという頭韻型（*aa/ax*）を極めて厳格に守っている。しかし、『ガウエイン』詩人が書いたとされる4作品の内、特に、『サー・ガウエインと緑の騎士』では標準的な*aa/ax*という頭韻型にとらわれない柔軟な頭韻パターンが多く見られる。例えば、必ずしも前半行に二つの頭韻が揃っていない*ax/ax*の頭韻型を持つ行、または*ab/ab*というように二種類の頭韻が見られる行がある。頭韻詩研究の歴史において、これらをすべて写字生の介入とし、写字生による間違い（書き換え）を多く含んだテキストであるとする研究者が多い時代もあった。¹⁸ しかし、韻律研究が進むにつれ、『ガウエイン』詩人のテキストは、ただ文学的に卓越しているだけでなく、テキストの綴りにおいても、非常に正確に作者の意図を反映しており、韻律分析の対象として信頼できるテキストであること

が実証されてきた。¹⁹ 事実、Putter-Jeffersonも、彼らの韻律分析に『ガウエイン』詩人の作品を扱っている。したがって、頭韻以外の要素が、極めて詩人の意図に忠実だと実証されているテキストで、頭韻だけが写字生の介入だと議論するには無理がある。柔軟性に富む頭韻型も、詩人の意図を反映していると考えるのが妥当であろう。

『ガウエイン』詩人の作品において、三つ以上の頭韻を持つ前半行は、例えば、戦闘、嵐、荒涼とした風景の描写といった音の効果が絶大な威力を発揮する場面に使われる傾向がある。それとは反対に（特に『サー・ガウエインと緑の騎士』において）、頭韻が通常より少ない、「軽い」前半行は、例えば会話場面のように、詩行がスムーズに流れて欲しい場面に使われる。場面によって、頭韻の数、そして韻律強勢と頭韻の一致・不一致が、詩人によって、微妙にコントロールされているのだ。それは、ちょうど、ショパンのピアノ曲において、一定の拍子を保ちながらも転調し、長調から短調へ、そしてまた短調から長調へと、一つの曲の中で微妙にかつ優雅に変化するようなものだ。

頭韻詩は黙読して読む文化ではなく、声に出して朗読された物語を聴いて楽しむ文化を前提として制作されたものである。したがって、『ガウエイン』詩人のように挑戦的な詩人は、「頭韻と韻律強勢の一致」という聴き手の予想を覆し、またその「期待を裏切る手法」を楽しむことのできる聴衆がいたはずだ、と著者は考えるのである。前半行において、韻律強勢と頭韻が時々一致しないという現象こそが、14世紀の頭韻詩韻律におけるリズム的・文体的変化とダイナミズムの重要な要素となっているのではないかと改めて主張したい。

前半行の韻律規則は、自ら唱えた説を含め複数の異なる韻律規則が主張・論議されており、未だ規則の「確立」には至っていないものの、解明に向かって前進している。本論で検証した作品はすべて北・北西部で制作された作品である。今後は、南西部の方言で書かれたウィリアム・ラングランド (William Langland) の『農夫ピアズ (*Piers Plowman*)』の詳しい韻律研究が必要となってくる。この作品は大作である上、多くの写本が現存しているため、分析は簡単ではない。しかし、『ガウエイン』詩人など北・北西部の頭韻詩人たちと語彙やスタイルで異なるラングランドの詩行が、果たして『ガウエイン』詩人たちと同じリズム構造を持っているのかどうか、という点を明らかにすることで、ME頭韻詩における非脚韻頭韻長行詩の全体像が見えてくるはずだ。あるパターンから一見外れていると思われる「例外」こそが、時として、韻律構造解明の証拠を提供してくれることがある。このような地道な積み重ねこそが、前半行の韻律構造およびME頭韻詩全体の解明につながるのではないかと信じている。²⁰

¹ 概ね研究者に受け入れられていると思われる規則を4つ挙げる。

- 1) 後半行に生起する二つの韻律強勢うち、最初の韻律強勢の前後どちらかに、必ずlong dip (二つまたはそれ以上の非強勢音節からなる) が一度、そして一度だけ生起しなければならない(Duggan, 'The Shape of the B-Verse'; Duggan, 'Metre, Stanza, Vocabulary, Dialect'; and Cable, *English Alliterative Tradition*.)。この後半行を規制するリズム・パタンの重要性は、脚韻詩が持つ「弱強」といった規則的に交代する音節型ではないということである。つまり後半行では、脚韻詩のx/x/x、またはxx/xx/といった「弱強」または「弱弱強」のような規則的なリズムの繰り返しは徹底して避けられたのである。
- 2) 行末は、必ず/x「強弱」のリズムが生起しなければならない (Cable, *English Alliterative Tradition* ; Putter, Jefferson, and Stokes, *Studies in the Metre of Alliterative Verse* , pp. 19-71)。

- 3) この行末の非強勢音節は、ほとんど全ての場合において曖昧母音でなければならない。また、後半行の二つの韻律強勢の間に起きるdip (xx(x)/x/x) が1つの非強勢音節からなるshort dipの場合も、このdipに起きる非強勢音節において、曖昧母音以外の母音は避けられる確率が非常に高い (Yakovlev, 'Prosodic Restrictions on the Short Dip')。
- 4) 後半行のdipを構成する非強勢音節の数は三つが上限である。つまり、後半行では四つまたはそれ以上の非強勢音節から構成されているdip (e.g. xxxx/x/x, x/xxxx/x) は韻律上許されない (Inoue, 'The A-Verse of the Alliterative Long Line and the Metre of *Sir Gawain and the Green Knight*'; Inoue, 'To/For to + Infinitive and the Long Medial Dip in Alliterative A-Verses'; Inoue and Stokes, 'Restrictions on Dip Length')。
- 2) 例えば以下を参照のこと。Cable, *English Alliterative Tradition*; Duggan, 'Extended A-Verses'; Duggan, 'Some Aspects of A-Verse Rhythms'; Russom, 'The Evolution of the A-Verse'; Russom, 'Some Unnoticed Constraints on the A-Verse in *Sir Gawain and the Green Knight*'; Cole, 'Rum, Ram, Ruf, and Rym: Middle English Alliterative Meters'; Yakovlev, 'The Development of Alliterative Metre from Old to Middle English'; Psonak, 'The Long Line of the Middle English Alliterative Revival'.
- 3) 例えば以下を参照のこと。Borroff, *Sir Gawain and the Green Knight*; Turville-Petre, 'The Metre of *Sir Gawain and the Green Knight*'; Turville-Petre, Thorlac, *The Alliterative Revival*; Putter, Jefferson, and Stokes, *Studies in the Metre of Alliterative Verse*; Inoue, 'A New Theory of Alliterative A-Verses'
- 4) 以下を参照のこと。Inoue, 'The A-Verse of the Alliterative Long Line and the Metre of *Sir Gawain and the Green Knight*'; Inoue, 'A New Theory of Alliterative A-Verses'; Inoue, 'To/For to + Infinitive and the Long Medial Dip in Alliterative A-Verses'; Inoue and Stokes, 'The Caesura and the Rhythmic Shape of the A-Verse'; and Inoue and Stokes, 'Restrictions on Dip Length'; Inoue, 'Hiatus and Elision in the Poems of the Alliterative Revival: *-ly* and *-liche* Suffixes'; Inoue, 'The Metrical Role of *-ly* and *-liche* Adverbs and Adjectives in Middle English Alliterative Verse'.
- 5) 本論で検証するテキストは以下の通りである。*Sir Gawain and the Green Knight*, ed. by Tolkien and Gordon; *Cleanness*, ed. by Anderson; *Patience*, ed. by Anderson; *The Wars of Alexander*, ed. by Duggan and Turville-Petre; *St Erkenwald*, ed. by Burrow and Turville-Petre. 引用のSG およびCIはそれぞれ『サー・ガウエインと緑の騎士』および『清純』を示す。
- 6) Three-beat a-verse theory (前半行は三つ以上の韻律強勢を持つことができるという見解) を持つ研究者には、頭韻と韻律強勢の一致・不一致という問題は関係ない。
- 7) 筆者の韻律規則の詳細については、註4を参照のこと。要約すると以下の通りである。
- 1) 前半行は少なくとも一つのlong dipを持たなければならない、それはmedial position (二つの韻律強勢の間に起こらなければならない。もしmedial long dipがなければ、代わりに一つ目の韻律強勢の前のdip (initial dip) がextra-long dip (四つ以上の非強勢音節から成る) であるか、または中間休止前のdip (final dip) がlong および/またはheavy でなければならない (例: 'Vpon such a dere day', SG 92a, 'Ne kest no kaelacion', SG 2275a, 'And he ar knyht comlokest', SG 1520a)。
- 2) 著者の 'heavy' dipの定義は、そのdipがopen-class wordまたは行末では禁止されているsecondary stressを持つ接尾辞を含むものである (例: 「形容詞+名詞」からなる名詞句の名詞: 'Ðat þe bit of þe broun stel', SG 426a)。
- 8) Putter and Jeffersonの前半行の韻律規則の詳細については、Putter, Jefferson, and Stokes, *Studies in the Metre of Alliterative Verse* (特にp. 260) を参照のこと。以下の2点に要約できる。
- 1) 前半行は、2つの頭韻を伴う韻律強勢がある。
- 2) 最初の韻律強勢の前と後ろにlong dipを持たなければならない。この条件を満たさない場合は、代わりにextra-long dip (四つ以上の非強勢音節から成るdip) または二つ目の韻律強勢の後のdip がlong またはheavy でなければならない。'heavy' とは、secondary stressを維持した接尾辞 (例: *-dam*, *-man*, *-chef*, *-ing*, *-les*, *-ly*)、短音節の副詞、そして "be" and "do" などの動詞である。
- 9) 以下の二つの例に関する詳しい議論は、Inoue and Stokes, 'The Caesura and the Rhythmic Shape of the A-Verse' を参照のこと。
- 10) もちろん、詩が実際に朗読されるパフォーマンスにおいては、規則的な二つの韻律強勢の他に、他の微妙にレベルの異なる強勢 (例えば、韻律強勢はないが語彙強勢のある語、韻律強勢はないが頭韻による卓立を与えられた語) も聴こえてくるだろう。

- 11 Putter, Jefferson, and Stokes, *Studies in the Metre of Alliterative Verse*, p. 221.
- 12 『アレクサンダーの戦い』および『聖アーケンワールド』においては、*quoth* の代わりに *quod* が使われている。
- 13 しかし、形容詞が *other* (例: 1938a 'Bi Kryst, quoth that *other* knyȝt') のように意味的に軽い場合は名詞が頭韻に加わる。
- 14 韻律上必要な medial long dip は、通常、非強勢音節が二つ (/xx/) もしくは三つ (/xxx/) であるが、initial dip (行頭から最初の韻律強勢までの dip) が短い場合は、medial dip が extra-long (非強勢音節が四つ以上) になる場合もある。詳細な議論は Inoue and Stokes, 'Restrictions on Dip Length' 参照のこと。
- 15 中間休止前に生じた「quoth + 名詞 (代名詞)」の48例のうち、以下の3例はほぼ同じ内容を含む ('bi God(de) quop Gawayn'): 2205a ('Penne Bi Godde, quop Gawayn'), 1498a ('He, be God, quop Gawayn'), 2250a ('Nay, bi God, quop Gawayn')。2205a は、綴りに反映されているように 'Godde' の dative -e を考慮すると、'Godde' と 'Gawayn' の間に medial long dip (/xx/) が形成される。頭韻詩人は、行末において、韻律上必要な非強勢音節 (曖昧母音) を作り出すために「前置詞 + 名詞」を使い名詞の dative -e を利用していることが分かっている (Putter, Jefferson, and Stokes, *Studies in the Metre of Alliterative Verse*, pp. 31-2)。したがって、dative -e が綴りに反映されていない 1498a および 2250a においても同じように dative -e を想定すると、これらの前半行も medial long dip を形成していると考えられる。
- 16 「to/for to + 不定詞」や「on/vpon + 名詞」が韻律に必要な long medial dip を作り出すために都合のよい syntactic-rhythmic pattern であるという議論に関しては以下を参照のこと: Inoue, 'To/For to + Infinitive and the Long Medial Dip in Alliterative A-Verses'; see also Inoue, 'The A-Verse of the Alliterative Long Line and the Metre of *Sir Gawain and the Green Knight*', pp. 118-200.
- 17 Line 1395a ('Dat watz not forward, quop he') に関しては、'he' は *freke* であった可能性も考えられるかもしれない。他のいくつかの例 (lines 1105, 1294, 2302) を見ると、行が r 音で頭韻を踏むときには *freke* が使われているからである。しかし、『サー・ガウェインと緑の騎士』では、得に会話のシーンにおいて、頭韻が軽くなる傾向にあるので、この 'he' は scribal error ではないと考える。
- 18 例えば Duggan, 'The Shape of the B-Verse'; Duggan, 'Metre, Stanza, Vocabulary, Dialect' を参照のこと。
- 19 例えば以下を参照のこと: Putter, Ad, and Myra Stokes, 'Spelling, Grammar and Metre in the Works of the *Gawain* Poet' Putter, Jefferson, and Stokes, *Studies in the Metre of Alliterative Verse*, pp. 47-8.
- 20 本研究は JSPS 科研費 JP 15K02287 の助成を受けたものである。

Primary Sources

- Cleanness*, ed. by John J. Anderson (Manchester: Manchester University Press, 1977)
- Patience*, ed. by John J. Anderson (Manchester: Manchester University Press, 1969)
- St Erkenwald*, in *A Book of Middle English*, ed. by J. A. Burrow and T. Turville-Petre, 2nd edn (Oxford: Blackwell, 1996)
- Sir Gawain and the Green Knight*, ed. by J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, rev. by Norman Davis, rev. edn (Oxford: Oxford University Press, 1967)
- The Wars of Alexander*, ed. by H. N. Duggan and Thorlac Turville-Petre, EETS, s.s., 10 (Oxford: Oxford University Press, 1989)

Secondary Sources

- Borroff, Marie, '*Sir Gawain and the Green Knight*': *A Stylistic and Metrical Study* (New Haven: Yale University Press, 1962)
- Cable, Thomas, *The English Alliterative Tradition* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1991)
- Cole, Kristin Lynn, 'Rum, Ram, Ruf, and Rym: Middle English Alliterative Meters' (unpublished doctoral thesis, University of Texas at Austin, 2007)
- Duggan, Hoyt N., 'The Shape of the B-Verse in Middle English Alliterative Poetry', *Speculum*, 61 (1986), 564-92
- , 'Meter, Stanza, Vocabulary, Dialect', in *A Companion to The 'Gawain' -Poet*, ed. by Derek Brewer (Cambridge: Brewer, 1997), pp. 221-42
- , 'Extended A-Verses in Middle English Alliterative Poetry', in *Medieval English Measures: Studies*

- in Metre and Versification*, ed. by Ruth Kennedy, special issue of *Parergon*, 18.1 (2000), 53-76
- , 'Some Aspects of A-Verse Rhythms in Middle English Alliterative Poetry', in *Speaking Images: Essays in Honour of V.A. Kolve*, ed. by R. F. Yeager and Charlotte Morse (Asheville: Pegasus, 2001), pp. 479-503
- Inoue, Noriko, 'The A-Verse of the Alliterative Long Line and the Metre of *Sir Gawain and the Green Knight*' (unpublished doctoral thesis, University of Bristol, 2002)
- , 'A New Theory of Alliterative A-Verses', *Yearbook of Langland Studies*, 18 (2004), 107-32
- , 'To/For to + Infinitive and the Long Medial Dip in Alliterative A-Verses', in *Approaches to the Metre of Alliterative Verse*, ed. by Judith Jefferson and Ad Putter, Leeds Texts and Monographs, n.s., 17 (Leeds: Leeds Studies in English, 2009), pp. 59-76
- , 'Hiatus and Elision in the Poems of the Alliterative Revival: -ly and -liche Suffixes', *The Yearbook of Langland Studies*, 30 (2016), 75-105
- , 'The Metrical Role of -ly and -liche Adverbs and Adjectives in Middle English Alliterative Verse: the A-Verse', *Modern Philology*, 114, issue No. 4 (2017), 773-92
- Inoue, Noriko, and Myra Stokes, 'The Caesura and the Rhythmic Shape of the A-Verse in the Poems of the Alliterative Revival', *Leeds Studies in English*, n.s., 40 (2009), 1-26
- , 'Restrictions on Dip Length in the Alliterative Line: The A-Verse and the B-Verse', *Yearbook of Langland Studies*, 26 (2012), 231-60
- Psonak, Kevin Damien, 'The Long Line of the Middle English Alliterative Revival: Rhythmically Coherent, Metrically Strict, Phonologically English' (unpublished doctoral thesis, University of Texas at Austin, 2012)
- Putter, Ad, Judith Jefferson, and Myra Stokes, *Studies in the Metre of Alliterative Verse*, Medium Ævum Monographs, n.s., 25 (Oxford: Society for the Study of Medieval Language and Literature, 2007)
- Putter, Ad, and Myra Stokes, 'Spelling, Grammar and Metre in the Works of the *Gawain* Poet', in *Medieval English Measures: Studies in Metre and Versification*, ed. by Ruth Kennedy, *Parergon*, 18.1 (2000), 77-95
- Russom, Geoffrey, 'The Evolution of the A-Verse in Middle English Alliterative Meter', in *Studies in the History of the English Language III: Managing Chaos: Strategies for Identifying Change in English*, ed. by C. M. Cain and G. Russom, Topics in English Linguistics, 53 (New York: Mouton de Gruyter, 2007), pp. 63-87
- , 'Some Unnoticed Constraints on the A-Verse in *Sir Gawain and the Green Knight*', in *Approaches to the Metre of Alliterative Verse*, ed. by Judith Jefferson and Ad Putter, Leeds Texts and Monographs, n.s., 17 (Leeds: Leeds Studies in English, 2009), pp. 41-58
- Turville-Petre, Joan, 'The Metre of *Sir Gawain and the Green Knight*', *English Studies*, 57 (1976), 310-29
- Turville-Petre, Thorlac, *The Alliterative Revival* (Cambridge: D. S. Brewer Ltd and Totowa, N.J.: Rowman and Littlefield, 1977)
- Yakovlev, Nicolay, 'The Development of Alliterative Metre from Old to Middle English' (unpublished doctoral thesis, University of Oxford, 2008)
- , 'Prosodic Restrictions on the Short Dip in Late Middle English Alliterative Verse', *Yearbook of Langland Studies*, 23 (2009), 217-42

付録

『サー・ガウエインと緑の騎士』(2025行)

A-Verse - 48 instances (pre-caesural): 256: Nay, as help me, quop þe habel, 372: Kepe þe, cosyn, quop þe kyng, 381: In god fayth, quop þe goode knyȝt, 390: Bigog, quop þe grene knyȝt, 398: Where shoulde I wale þe, quop Gauan, 776: Now bone hostel, coþe þe burne, 811: Gode sir, quop Gawan, 813: ȝe, Peter, quop þe porter, 1037: Grant merci, sir, quoth Gawayn, 1050: For soþe, sir, quop þe segge, 1068: Þenne laaande quop þe lorde, 1093: For ȝe haf trauayled, quop þe tulk, 1105: ȝet firre, quop þe freke, 1241: In god fayth, quop Gawayn, 1263: Madame, quop þe myry mon, 1268: Bi Mary, quop þe menskful, 1276:

Iwysse, worþy, quop þe wyȝe, 1294: Querfore, quop þe freke, 1381: ȝe iwysse, quop þat oþer wyȝe, 1385: Þis is soth, quop þe segge, 1392: Hit is god, quop þe godmon, 1395: Þat watz not forward, quop þe, 1487: What is þat, quop þe wyȝe, 1492: Do way, quop þat derf mon, 1495: Ma fay, quop þe mere wyf, 1498: ȝe, be God, quop Gawayn, 1535: In goud fayþ, quop Gawayn, 1635: Now, Gawayn, quop þe godmon, 1637: Hit is sothe, quop þe segge, 1641: Now ar we euen, quop þe habel, 1776: God schylde, quop þe schalk, 1792: Þat is a worde, quop þat wyȝt, 1801: Now iwysse, quop þat wyȝe, 1938: Bi Kryst, quop þat oþer knyst, 1942: Mary, quop þat oþer mon, 1969: In god fayþe, quop þe godmon, 2126: Grant merci, quop Gawayn, 2140: Mary, quop þat oþer mon, 2189: Now iwysse, quop Wowayn, 2205: Þenne Bi Godde, quop Gawayn, 2239: Gawayn, quop þat grene gome, 2250: Nay, bi God, quop Gawayn, 2270: Þou art not Gawayn, quop þe gome, 2288: Haf at þe þenne, quop þat oþer, 2302: For soþe, quop þat oþer freke, 2407: Nay, for soþe, quop þe segge, 2429: Bot your gordel, quop Gawayn, 2505: Lo, lorde, quop the leude.

4 instances (line-opening): 405, 1110, 1302, 1779; **1 instance (mid-line):** 2217

B-verse (8 instances): 309, 343, 1213, 1248, 1383, 1489, 1940, 2444

『清純』(1812行)

A-Verse - 12 instances (all pre-caesural): 139: Say me, frende, quop þe freke, 345: NOW, Noe, quop oure lorde, 349: Enter in þenn, quop he, 621: Fare forthe, quop þe freke, 729: Nay, for fyfty, quop þe fader, 733: Aa! blessed be þow, quop þe burne, 739: And fyue wont of fyfty, quop God, 757: What for twenty, quop þe tolke, 761: Now, aþel lorde, quop Abraham, 765: I graunt, quop þe grete God, 929: Þenn fare forth, quop þat fre, 1593: Kene kyng, quop þe quene

B-verse (1 instance): 925

『忍耐』(531行)

A-Verse - 4 instances (all pre-caesural): 85: At alle peryles, quop þe prophete, 205: I am an ebru, quop þe, 347: ȝisse, lorde, quop þe lede, 493: Hit is not lyttel, quop þe lede

『アレクサンダーの戦い』(2093行: 1 ~ 1735行目、および4842 ~ 5200行目 編者による校正を含む行は除く)

A-Verse - 43 instances (pre-caesural): 97: Haue þou na care, quod þe kyng, 183: For, certayn, quod Syraphis, 235: Haile, maistir, quod þat myld, 242: A, athel qwene, quod Anectanabus, 270: My frely fode, quod þe freke, 294: Þan will I, quod þe wale qwene, 298: Nay, noȝt for ay, quod þe freke, 306: Athill qwene, quod Anectanabus, 314: Þat will I wele, quod þe wee, 370: Graunt mercy, quod þe grete clerke, 402: Be noȝt abayste, quod þe berne, 434: Phylip, quod þe phyllysofyre, 438: To þe lyon hede, quod þe lede, 460: Þou has ragid, quod þe rene, 516: Þat graunt I gudly, quod þe gome, 541: ȝa, wynnes ȝow vp, quod þe we, 547: Now bow þe doune, quod þe berne, 585: Anopire barne, quod þe berne, 675: Be noȝt afriȝt, quod þe freke, 685: Þat can I wele, quod þe clerke, 723: What? and am I, quod Alexander, 804: Þat graunt I gladly, quod þe gome, 848: For it was wont, quod þe wee, 852: Sa maydeus, quod þat opire man, 865: And be þe god, quod þe gome, 870: Hent þe þare, quod þe hatill, 948: Fadire, quod þis fell knyȝt, 984: Philip, quod þis ilke freke, 1012: ȝa, aires hame, quod Alexsandire, 1090: Bot ȝit it gladis me, quod þe gome, 1140: Nay! be my croune, quod þe king, 1156: ȝe Calodoyns, quod þe kyng, 1190: A! hilla haile! quod Alexsandire, 1216: Nay, qua miȝt þat, quod þe man, 1224: Sire, certayne, quod Seraphis, 1257: Þat Anectanabus, quod þis athil kyng, 1313: Now be þat god, quod þe gome, 1588: For me had leuir, quod þe lede, 5059: Haile, Alexsandire, quod þis athill, 5073: ȝis, by my croune, quod þe kyng, 5119: Quat loke ȝe, quod þe ladisman, 5150: So maideux, quod þe mone-tree, 5173: If ȝe will gange, quod þis gide.

6 instances (line-initial): 354, 470, 574, 681, 800, 972; **1 instance (mid-verse):** 863

B-verse (7 instances): 287, 689, 701, 1254, 1728, 1732, 5065

『聖アーケンウォルド』(352行)

6 instances (all pre-caesural): 146: Lo, lordes, quod þat lede, 159: Þou says soþe, quod þe segge, 193: Bisshop, quod þis ilke body, 225: Dere sir, quod þe dede body, 265: Nay, bisshop, quod þat body, 315: Oure Lord lene, quod þat lede